

②乳幼児家庭教育センターの活動

菊池汎子

一 はじめに

人間の寿命が、年を経るに従って延びて行く。ここ一〇年の間に、女性は平均寿命八〇歳を越えるかも知れないという。つまり子育てという大事業を終える年齢の四〇歳ごろから、もう四〇年生き続けるとするならば、なにを目標に生きていくか、ということを直視しなければならぬ。五〇歳も過ぎてくると「……これから先、子どもが結婚してそれぞれ独立して、夫と顔をつき合わせた二人だけの毎日になるかと思うとぞつとする……」と感ずる人も多い。夫と何を話し、何をするか、何に拠る所を持つか。つまりすべて子どもに尽す、夫に尽すのもいいが、真剣に自分のことを見失わないようにしていないと、なんのために生きているの

か空しいばかりである。あげくに、共に暮らしてきた夫も疎ましくなるといふのが、偽らぬ真情であるかも知れない。

人は、生きる証明として、自分を支えるもの、何が生きがいであるのかを常に希求していると思う。

つまり生涯の生きかたを、主体的に選び、計画を立てて、自分なりの適性・能力・個性を十分に発揮しながら、自己実現をはかる。そのために、同じ課題・悩みを持つている人たちを話し合い、共感を持ちながら、さらによりよい方向を見つけ、学習を深め、実践に繋げていく。そうしたグループ活動をすすめるための援助をするのが、婦人会館の役割である。

○婦人の学習の場であること
○婦人活動の拠点であること

○婦人の交流の場であること

○婦人教育に関する情報提供の場であること

これらをかかげて、まさに婦人会館という名の施設が、婦人の手によって十二分に活かされる機能を持つことが望ましいと言える。

会館では「婦人のための教室」「教養講座」等で、文学・医学・心理・歴史・芸術・生活技術（料理・編物）等、幅広く提供して、学習者の増大をはかっている。

さらには、それらの学習者が、自主グループとなり、内容の深化をはかるとともに、その仲間もまた増えていく。

あるいは、自ら企画運営者となって、講演会・講座等を開き、ひろく婦人層に呼びかけ啓発活動の主体者となっている

一 はじめに

二 都市における子育ての現状

三 母親グループの育成

四 横浜乳幼児相談ボランティアグループ

五 さいごに

グループもある。

いつでも、そこに行けば学習する場があり参加することができるということ、自己の可能性を伸ばし、かねてから試みてみたいと思っていた欲求が触発され、顕在化してくる。

デッサンのグループで熱心に続けている七〇歳になる婦人は「……結婚するまでは小学校の教師をしていたが、家庭に入ってから、家事万端に追われて、それに主人の理解もなかったもので、外に出るとか、絵を描くとか、思いも及ばなかった。ここ三年前から、I地区センターで、油絵を描きはじめたが、素晴らしい先生に遭遇できたこと、お友達もできたことで、毎日が生きかえったように楽しい。美術史、建築も勉強したい。……いつかやってみたい、という気持を持ち続

けたことが、こういう機会に恵まれた、
と言えるのでは……」と話された。

また、グループ「A」の場合は、PTAの役員をしていた人たちで、家庭教育学級を運営した経験を生かして、地域での生涯教育セミナーも手がけた。さらに、PTAを卒業しても、学習グループとして活動を続けている。「女性の生きかた―素晴らしい中年になるための―」講座をはじめ、古代の歴史をひもどくなど、豊かな趣味・教養を求める反面、婦人としてもっと社会的な視野をひろめるためには政治・経済への関心を深める必要があるということで、「世界の中の日本が考える有権者づくりのための講座」をすすめている。

家庭婦人も家庭から、一歩出ること、社会とのかかわりを持ち、さらにひとりひとりの生きかたを持つための学習、生活を経験している。このグループの人たちはさらに、「同じような他の学習グループの人々と交流しお互いに助け合いを持って、力になり合える機会が、婦人会館を中心にして……」と熱望している。

五十六年二月には、婦人会館新築三周年記念事業と銘うって、会館を利用して、あるグループの自主的な運営のもとに、多彩な発表を繰りひろげた。全市的にみれば、限定されたグループになったかも知れないが、ここから生まれてきた活力

を大切にしながら、波及していくことを期待したい。

この稿では特に、婦人会館のなかでも、乳幼児家庭教育センターですすめている、母親のグループ活動を中心に述べることとした。

二 都市における子育ての現状

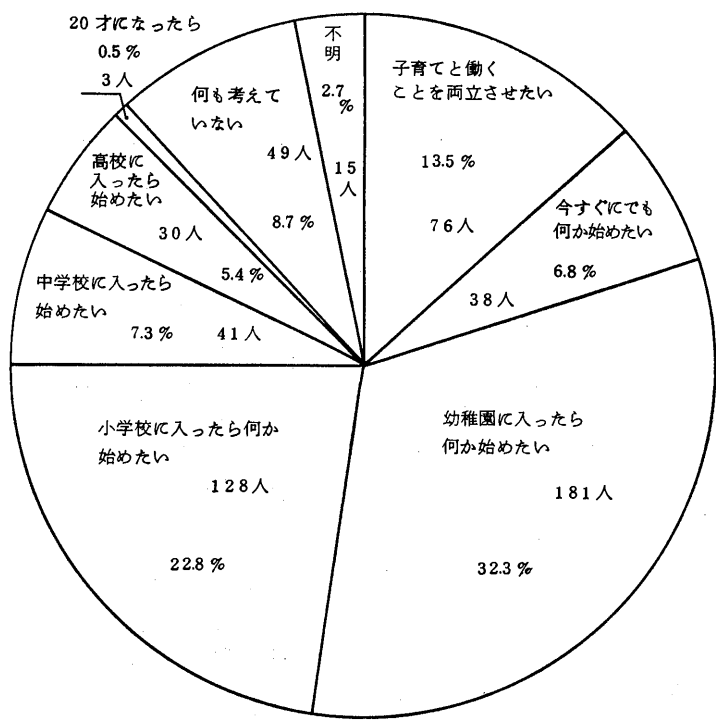
横浜は、ここ一〇年の間に人口が急増した都市であり、ピークの時は一年で一〇万人の人々が流入してきた。当然のこととして、新しい家庭づくりを始める人が周辺の新しい団地に住居を構えることになる。ここで第一子を迎え、産院から、あるいは実家から帰った途端に赤ちゃんの泣くこと、ミルクを飲まないことから始まって、便がおかしい、夜寝ないというように心配や不安の連続である。

母親の育児力が弱くなったとか未熟であるということがよく言われるが、要因としては都市化現象の顕著なこととして(1)家族形態が単一化しているため、相談をする身近な人がいない

(2)育児に関する情報が、育児書、雑誌を

居住年数	割合
1年	7.3%
2年	12.1%
3年	18.9%
4年	20%
計	58.3%

図一 母親のこれからの生き方



はじめ豊富にあるにもかかわらず、実際の応用が効かない。このことは、母親が少女期から成人に至るまで小さい子(乳児・幼児)を身近に抱いたりお守りをした経験がないまま母親になってしまったことにも関連があるように思える。

馴染みのない土地に居を構え、近隣との付き合いがないまま、子育てが始まる。しかも中高層アパートの三階以上に住んでいる家族が二八・三%と三人に一人弱の割合で、高層のアパート群で子育てをしている(センター調査より)。

下から苦情がくる。エレベーター、階段の手すり等危険だらけで、ついて廻らなければ遊びにも出せない、といった状況は深刻である。

母親の学歴もいまは高くなり、短大、大学とかなり専門的な分野で資格を持つ人も少くない。職業についていた人であれば、結婚しても事情が許せば、働き続けたいと願っている。しかし条件として、健康、保育所の確保、勤務条件、夫の理解、協力等、どれが欠けても、仕事を続けることは難かしい。現に職業人（女性）の中二人に一人は既婚者であるという統計も出ているが、この実態としては、子どもに手のかからなくなった時期からパートタイマー等に出ている人が多いと思われる。心ならずも職業を中断し、家庭に入ることの空虚さは子育てで埋めつくされなれないと思っている部分がありはしまいか。

女性が自立することの条件として、経済的な要素も見逃がせないが、身につけた技術を生かす、あるいは能力を發揮することで生きがいを求めるとするならば、子育て中の母親は、その期間の空白をどうやってとり戻すかという関心は高いようである。

緑区で開かれた乳幼児学級（乳幼児を持つ母親のための家庭教育に関する学習をする学級）に参加した母親のことばと

して、「私は自分のためにも仕事を続けていきたい。それには週二時間だけ時間がほしい」「この子の手が離れるようになるまでに、どうしたら今自分の持っている技術の低下を防ぐことができるか」「再就職の可能性は望めないのか」といったことが真剣に出されていた。アンケート調査によれば、小学校に入る前までに何か始めたいという気持が強い（五二・六％）（図一）。その傾向としては、

- 資格を生かす（教員、看護婦、英語、保険事務等）
- 趣味と実益を兼ねる
- 資格を取得したい（語学、保育、医療事務、洋裁）
- ボランティア活動

つまり、子育ての時期には、それに全力投球というより、少しでも時間をみては、自己の確立のために、あるいは経済的な自立を試みようとする眼が向けられているのである。

センターの電話相談を通して感ずることの一つに、大半の母親は、子どもの人格をきちんととらえ、子ども自身が自立していくための素晴らしい援助者となり得ていると思いたい。一方、母親中心に子どもを見る、子どもに振りまわされる母親、子育てに無関心な母親を見受けることがある。これらが、多かれ少かれ反映している子育てのマイナス面は、必

ずといって良い程、子どもが情緒的にアンバランスとなり、攻撃的、遊べない、退嬰的、夜尿、ことばの発達のおくれまで生ずることがある。このことは、母親、もしくはこれに替わる人とのかわりかたによる影響が原因となっているのである。

現在、母子関係の研究がすすみ、出産直後の母子のかわりかたを始めとして、子どもの愛着行動が「母親の母性を育てる」とまで言われてきている。つまり、女性が誰でも母性を持っているのではなくて、母親と子どもの相互作用の中で育はぐまれていくものだというのである。

一方、これまで言われてきた、母性は生来、女性に備わっているという説は覆えられたとともに、子どもを育てる人は、母親が絶対不可欠であるということが稀薄になってきていることも否めない。

三 母親グループの育成

文化・科学がこれほど進歩していく中で、子どもを育てることの基本的な考えかたは、むしろ原始に戻してみる必要があると言えるかも知れない。

A幼稚園の園長さんが、つくづく述懐しておられた中に「いまの子どもは、

土を知らない。はだしになって走ること知らない。土のぬくもり、冷たさ、乾けば埃になって舞い、水に逢えば泥になる。種を植えれば、命の芽生えがある。この変化に富んだ土は、まさに人間の生活の原点であり、人間本来のすがたをとり戻すものであるのに、はだしにすれば爪先立ちをし、触らせれば汚い、という。しかし、その素晴らしさを一度経験すれば、子どもたちは土の上をころがり、肌をつけて感性を豊かにしていくのです……」と。

このように、子どもに経験してほしいこと、遊びを豊かにすることの大切さに気付いても、一人のお母さんの力では中々その方法や場づくりがむづかしい。

センターで調査したアンケートによれば、「子どものことについてお母さんがたと学習したい」：四七％、「話し合ってみたい」：四二％（五〇年）。また、五十五年度の調査でも、「身近かに相談できる場がほしい」：五九％、「話し合い、学習の場がほしい」：三五％となっている。

地域に馴染まないまま、孤独な状態で子育てをしているからこそ、このように強い要望が出てくる。このことは、相談を受けている中にも十分伺うことができ。たとえば「やたらと、通りがかりの子どもに噛みつく」という相談を受け

ながら、下に赤ちゃんのいること、その世話でお母さんがお兄ちゃんを疎外していることに気付いて「赤ちゃんの世話ばかりに気を取られて、Y夫ちゃん少し淋しいのじゃないかしら？」と言ったとすると「はっ」と気付く。

地域の中で、身近にお母さん同士の気付き合いがあれば、独りで悩む、あるいは間違った叱りかたをしなくても済む。

母親同士が子どもを育てていること、もろもろを共感し合える、あるいは経験を通して相互に助け合うといったことをニードとして持っている。このことに着目し、母親のグループづくりをすすめたのである。

① 母親グループのめざしていること

子どもを育てることは、地域をよくしていくことと深いかわりのあることに気付き、どのようにしたらそれに近づけることができるか。

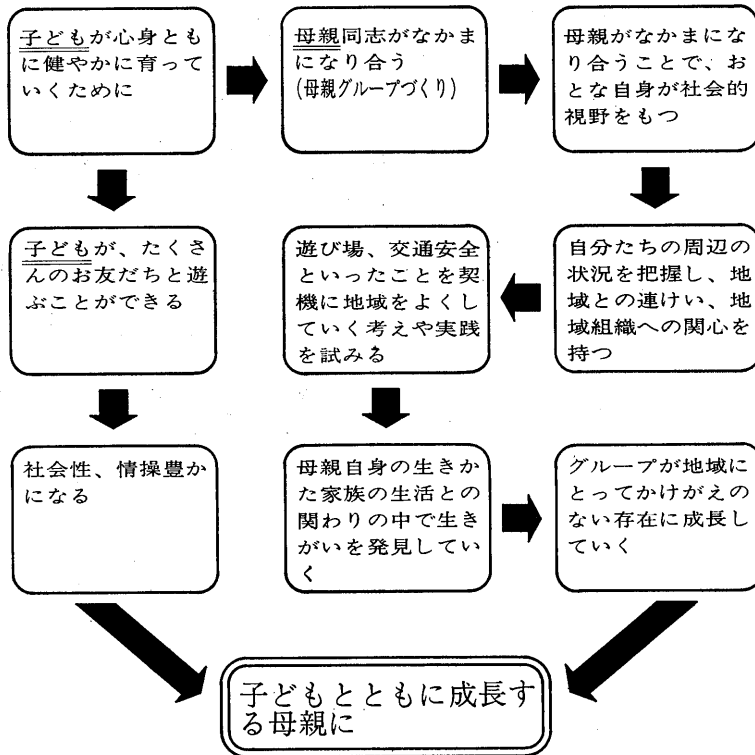
1. 母親自身、社会的視野をひろげる。地域社会の認識を深める。

他の人の話によく耳を傾け、つきあいが上手にできる。

ものごとを客観的にみることができ民主的なリーダーとなる資質を身につける。

2. 子どもを見る眼が的確になる。
3. 母親自ら主体的に生きる力を漲らせ

図-2 母親グループのめざしていること



ことで、子どもの自立心は豊かに育つ。
4. ボランティア活動として地域社会に役立つ、あるいは自ら休得したことの還元(奉仕)をする。
これらは、少くなくとも家庭の中においてでは育たないことであろう。

② グループのできるきっかけ
乳幼児家庭教育センターでは、事業として、相談(電話相談、個人相談、グループ相談)・母親の学習活動(かんがるう学級・母親グループ育成、母親グループ研究会)・調査研究(働く母親の家庭教育通信、年間事業のまとめ作成)・啓発資料(センターちらし、ポスター、母

親グループだより、働く母親だより)等を通してすすめている。これら事業を網の目のようにくぐらせながら、母親グループができるきっかけをつくっている。たとえば……

● かんがるう学級(母二五人 子三〇人)で、二〇時間(週一回・延一〇回)学習した後、地域に戻り、二〜三人が核となって地域の母親たちと集まり八人〜一〇人ぐらゐまでの規模で活動をはじめよう働きかける。

● 電話相談で話をしている中で、母親自身仲間がほしい、子どもの遊び仲間がない、という訴えを聞いた場合、三〜四人からでもよいから声かけられたら、家庭教育相談員が訪問できることを助言する。

● 新しい地域、特に周辺に出来た団地にスタッフ(専門相談員、家庭教育相談員)が出掛けて行き、相談を受けることをきっかけにグループのできるよう働きかける。

最初は子どものしつけ、健康についての話し合いから始まって、遊びの工夫、仲間あそびの問題、生活時間のみなおし、衣・食の工夫といった日常の体験を通して、よりよい子育てを考え合う。特に、母親の手づくり、あるいは子どもと共同製作することで、創造性、情操が豊かになることを体得する。

表一 2 母親グループ一覧 (56.7 現在)

グループ名	人数		場 所	回 数	活 動 内 容
	母	子			
す み れ (神奈川県菅田町)	30	28	団地集会所	0～2歳 月1回	子どもはOBの方が保育 月1回のリーダー会議 合同の年間行事 その他各グループでの話し合いと行 事
			団地内公園	3歳 週2回	
			図書室	4～6歳 週6回	
ぼ っ ぽ (港北島山)	10	11	鳥山公民館他	年 13 回	子どもとともに成長するために
よ つ ば (神奈川県子安台)	5	6	子安台公民館	週 2 回 (月・木)	年齢が低いため主に内あそび あそびの工夫
か も め (港南区日野)	5	5	団地集会所他	月 3 回 第1第2第3金	研究会の出席と報告 あそび
すくすく港北 (港北区勝田町)	8	8	菊名地区センター 会員宅	月 2 回	野外活動、料理、パッチワーク 絵本の与え方、読書会他
すくすく港南 (南区別所)	6	6	婦人会館 戸外・会員宅	月 4 回	子どもとともに、親子体操 紙芝居、手遊び、絵本他
レザック (磯子区丸山)	6	7	婦人会館	月 1 回 (木)	絵本づくり
つ ぼ み (南区井土ヶ谷下町)	6	7	会員宅	月 2 回 (木)	子育ての本を読み、話し合い 野外活動、料理
権 太 坂 (保土ヶ谷区権太坂)	33	33	自治会館	年 12 回	子どもと共に学び活動する 6回講演会、6回創作活動
どんぐり (港南区野庭)	6	11	各会員宅 もちまわり	週 1 回 (月)	昼食をともにし学習
ひ か り (保土ヶ谷区岩井町)	13	19	会員宅 アパートの内庭	週 1 回	外遊び、安全食品の試食会 研究会の出席と報告、話し合い
西ヶ谷しゃぼん玉 (戸塚区上郷町)	8	8	屋 外	月 1 回	集団で遠出、クリスマス会
き り ん (南区六つ川)	16	21	公園・会員宅	月 2 回	友達あそび、遊び場確保
遊びのサークル(仮称) (旭区上白根町)	5	7	会員宅 団地内公園	週 1 回 (金)	からだを動かす遊び リズム体操、創作、はり絵
どろんこ (緑区川和町)	12	14	川和町 森会館	月 2 回 第2第4木	近くの山でどろんこになって遊ば せる。絵本製作、講演会

「Kグループの場合」電話相談でK団地に住むHさんから、しつけ、あそびの相談を受けている内に、相談員が「…三四人からでも良いから団地の公園でい

つも顔の合うお母さんに声をかけてみて下さい。もし、集まれるようでしたら相談員が伺いますよ。」と助言する。十日ほど経って、Hさんから電話「…勇氣

を出して、お母さんたちにお話してみたところ、賛成してくれました。そのうえお友達も誘ってくれたので一人は集まれそうです。会場はIさんのお宅を提供

あとのグループを入れて二〇グループになる。これらのグループの態様は、何の規制も持たず、すべて母親の自発性、自主運営に任されている。センターに要請があれば、相談員が訪問するし、必要な情報を提供する。しかしどんなに小さなグループであっても、続けていくためには、ルールもあるし、ひとりひとり努力し合わなければならぬ。取り決めを守り合うことも大切である。

③ 母親グループが統
くために
現在、センターに報告されているグループは、表一2の通りであるが、五十六年度のかんがるう学級を終えた

- 専門講師の話聞き話し合う
- 2 グループ活動の基礎的な学習
- グループダイナミックス
- 地域とのかかわり
- 社会資源の活用
- 運営上の役割
- 3 保育の工夫
- 遊具のつくりかた

「おむつのはずしかた」から、おもちゃ、叱りかた、睡眠のしつけといったことで、お互いの経験交流も深めながら充実した話し合いとなった。さらに継続してこのグループが集まれるよう、プログラムの内容、役割分担などを検討する。

○ 研究会の内容

- 1 学習の方法を実際に経験してみる
- テレビ視聴による話し合い
- 資料(図書・雑誌)を読んで話し合う

センターでは、月一回母親グループ研究会を開いて、グループミニ学習をはじめ、家庭教育の専門の話、遊具づくりなどの研究学習をしてみている。これに各グループの代表が参加して持ち帰り、参考にしてもらっている。

○仲間あそびの実際
○親子レクリエーション

○預かりっこ工夫
4 グループの情報交換

○経験を活かし合う
○グループ訪問

横浜市に二四万人からの乳幼児の存在している中で、グループが二〇というのは、お話にならない程少ない。しかし、子どもの乳幼児期に、母親同士が仲間になり合えたことの経験は、これからの長い人生の中で十二分に活かしていける貴重なことであると思う。

事実、多くの母親たちから、ボランティア活動への参加、幼稚園母の会、PTAとその役割を積極的に受けているという声を聞いている。まさに着実に、自己の確立、社会参加への第一歩も二歩も踏み出した母親たちである。

四 横浜乳幼児相談 ボランティアグループ

母親グループを育成していくために密接な協力が期待されるのがこのボランティアグループである。

婦人の社会参加、婦人の自立を目ざしている中で学習する婦人が著るしく増え

ている講座が花盛りで、Aカルチャーセンターをはじめ、横浜駅周辺だけでも年間何千人と受講しているであろう。そこでは、個人的に技術の習得をはじめ、趣味にしても講師と結びつきたいわば師弟関係は生まれても、横に連けいしていくコミュニケーションはあるのだろうか。

むしろ、人との交際まじりの煩わしさから逃れるために、独りで学び、独りで楽しむことが目的であるかも知れないし、それがまた、都会性と言えるのかも知れない。

社会教育の考えかたから言えば、抽象的なことに想い憧れるだけではなくて、具体的な問題について、自ら解決するための考えかたや決断をすることである。そのためには、地に足をつけた、身近かな地域社会の中で取り組むことである。

ボランティア活動の志向している傾向はそういう意味で、身近かなところから、自分の出来ることを活かしていくために、社会に役立つ、あるいは自己実現していく適切な活動と言えらる。

横浜の社会教育でも、このところに着目し婦人ボランティア育成講座を開設し、地域の乳幼児をもつ母親に向けての援助活動を目的としたコース「乳幼児の母親に対するボランティア」を設けた。五十一年度から六年間に亘って開設し、受講生の自主グループが出来た。講座に

参加した受講生は、感想としてつぎのように述べている。

「大学を出て七年間公務員勤めをし、結婚して三人の子育てに専念し健全な家庭生活を過ごせた。下の子が一〇歳になったところで、私自身これからの人生を想い、学習、再就職のことなど、社会とのかかわりを持ちたいと思うようになった。……この講座を受けて、なんの脈絡もなく持っていた知識が体系づけられ、とにかく専業主婦として、子育てのみに専念してきただけの中年女性が必要とされる場のあることを知り、こんな素晴らしいことはないと思う……」

「幼い子どもを抱えた母親の多くが現実に何らかの援助を必要としている。この母親達にどんな形で手助けができるだろうか。

私が気になるのは、どこにも決して出て行かないで、家の中で助けを求め方も判らずに悩んでいる人たちである。一人の隣のおばさんとして役に立ちたい。私と同じ思いを持つ人たちと仲間になり、具体的な活動をしていきたい」と述べている。

このボランティア活動は乳幼児の母親に対してという限定した内容を捉えているので、これまでの活動は

- 母親の学習(学級・講座)の時の保育
- 母親グループへの援助(遊び・相談)

● 地域における乳幼児学級の企画運営
(母親の学習・子どもの保育)

● 母親個人に対する援助
といったことであるが、活動してみると役立つためには、それなりの知識、技術を習得する必要も生じてくる。

五 かんじい

婦人会館は、現段階において、さまざまな婦人の学習の機会を提供することで自主的なグループが生まれてきているのは画期的なことである。また、既成のグループも部屋を借りることが機縁となつて会館を拠点として会館が主催する事業にも積極的に参加するようになる。つまり会館は、自主事業を多くすればするほど、グループ活動を産み出す原動力となる。会館だけでは応じ切れないだけの数になるかも知れない。

会館は専ら、貸館的性格で抱え込むだけでなく、地域に根づいたグループ活動になるための手だてを決断しなければならぬであろう。地域にある類似施設との連携い、グループ活動を援助するリーダーの養成、ボランティア活動のための研修が必要となってくる。

婦人会館に位置づいている、乳幼児家庭教育センターは、その意味では婦人のグループを育てる原点に立ったすすめか

たをしていると思う。将来とも会館に止どまらず、地域に志向し、各区にプランチ（相談コーナー・母子で集まれる場）の出来て行くことが夢である。

これからの会館の使命としては、婦人に関するあらゆる情報を揃えながら、生涯を通しての学習・研究・グループ活動を・ボランティア・職業等に関する要求に

対応できる窓口（相談・資料提供）を設け、横濱の全婦人に頼られる施設になつていくことを実現するのは難かしいことであろうか。

〈婦人会館 乳幼児家庭教育センター 職員〉

③ 地域活動をとおして見た婦人問題

山口定子

一 ―― はじめに

今回おすすめに応じまして、ここに私のささやかな地域活動の体験から見ました婦人問題を記しますに当り、私の関与しました活動の経過等を申しあげ、その根拠となりました私の考え方も述べさせていただきます。

昭和十年に旧制高等女学校を出ましたあと、平凡に結婚致し、二男一女を生み育てました。四年前に八七歳で亡くなりましたが、結婚以来常に同居しておりましたので、私の社会活動にも、いろいろな面で影響を受けました。私の育った

家庭環境は大変開放的で精神主義的の雰囲気を持っておりました。私の三人の子供は

中学校までは地域の公立校に在学しましたので、PTA活動十三年間に戦後の民主化教育は母子共々ここで受けたことになりませんが、私にはそれを受け入れる素質が多分にあったように思われます。自分の考えを持ち判断し、言動に責任を持つこと、他の人との意志の交流を図り、互に育ちあうこと、仲間と共通の課題を

追求して前進すること、こんな考え方で、ひたすら家庭と地域社会を結び続けて来ました。途中でちょっと職業キャリア（保母資格）に挑んでみましたが、残

念ながら家庭破壊の懸念が生じたので中止しました。

地区PTA活動から民間図書館運営に開わり、昭和三十三年に地域婦人会を発足させ、市内の婦人会組織への参加によって地域活動の輪をひろげました。その中で婦人学級をとりいれ、昭和三十九年から生活学校運動（新生活運動）にも

取り組み主婦の社会性を育てる足がかりとしました。家庭から小地域社会へ、小地域社会から更に広い地域社会へ主婦の理想が自己と実社会を結びつけるように情報を入れ、学習、実践を心がけて来ました。その中で多くの仲間が私を助け励

- 一 ―― はじめに
- 二 ―― 新生活運動
- 三 ―― 東寺尾図書館
- 四 ―― 婦人問題について
- 五 ―― 主婦と経済的自立
- 六 ―― 主婦の社会参加―地域婦人団体の問題点

まし共に歩んでくれました。

世の人々が一つでも悲しみを消すことができ、一つでも悲しみを消すことができ、個人的には昭和五十年の民生委員委嘱、昭和四十四年には家庭裁判所調停委員選任を受けて現在もこれを続けながら、おせっかい人生の終着点に近づこうとしています。

二 ―― 新生活運動

① 新生活運動とは

財団法人新生活運動協会は昭和三十一年九月に設立、目的は国民自らが創意と